

特集
反原発運動における直接行動の展開



特集

ヨーロッパとアメリカの

反原発・非暴力直接行動

ベトナム戦争の終結後、そのすこし前からすでにあらわれていた諸運動の停滞、組織の分裂、路線や目標の轉移、権力の烈しい弾圧と巧妙な分断政策、そしてここ数年のうちに、少数孤立した人たちの「いわゆる過激化」という状況がひろがった。ヨーロッパやアメリカもまた同様である。

だがまた、そういつた状況をうちやがめるものとして、最近、ヨーロッパに、ついアメリカに「新しい波」がおこった。その波は次第に高まりつつありとなり、まさに大きな潮流となろうとしている。それをごく簡略にならば、地球的なエコロジー運動、より具体的には「原子力発電」反対運動に集約され、もしくは関連づけられるだろう。

おそらくそれは、日本における六〇年の安保斗争、七〇年のベトナム反戦のようには、八〇年を前後として、日本全土を席卷する向きの焦点となり、諸運動の連合と活動の源泉ともなるものだ。それをいま先触れするものとして、本特集の三つの文章はある。現在のぼくらの運動と周囲の状況をどのようにきりひらくか、その展望の示唆としてある……

フランスのニ里塚ーラルザツク

西尾昇

ラルザツクでは、仏陸軍演習地拡張に対する反対斗争が根強く行われている。ミヨーをすぎた岩がごろごろしているラルザツク高原の国道を行く。崖に大きく「ラルザツクは生きる」と白くか、れている。荒涼に

るな野。人家らしいものは見えない。

しばらく走っていると灯りが見えた。人家である。ようやく辿りついて石の段を上り、ドアを叩く。

風がとても寒い。

四十歳くらいの農民が顔を出したが、日本から来た住民運動の者だという和外に出てきた。

そのうち近所の人が車をたずねてきた。犬が見えなりので探した来たとのこと。その人が反対同盟のレオン・マイエさん、村の議員である。資料があるというので、その車に先導されて行く。曲がったりくねったり敷キ口行くと、納屋がある。昔の馬小屋を改造したもので、天井に藁が三つくらい吊されていた。

この一隅が印刷物倉庫で、ここに入り、ラルザック闘争の杖関紙『カルタレム・ロ・ラルザック』へラルザックを守ることを、号を追ってそろえてくれ、他の資料をも探してくれる。

マイエさんから教えてもらった次のクループは、電灯がなくローソクだった。

翌朝また早くからラルザックに行つて前夜のクループを訪ね、そこから次から次へと教えてもらつて四つのクループを訪問して話し合う。ラ・アラキエールの羊小屋をも見る。協力の印にクループ名を刻んだ石を押しながら小屋のまわりを一周する。三十以上の名があった。協力の尊さをひしひしと感ずる。

最後のクループは、フランスのかンジーといわれるランザケルバストの影響のある宗教色の豊かなところ。ロジエ・モローさんは軍隊の買った土地にある廃屋を自分で修理し、周りに自然菜園をつくってコミュニ

ーンの生活をしながら非暴力反対運動をしている。ラルザックについては、すこし詳しく報告してきたい。今日の日本の水俣あるいは三里塚と同様に全フランスの住民闘争を広く結集する役割を果たしており、寧ろべき点が沢山あるからである。

フランス中央山地の南は、コースと呼ばれる高原地帯で石灰質の岩石によって形成されており、タルン川その他の水流の浸蝕作用によって深い峡谷と切り立った崖によっていくつかの部分に分けられている。ラルザックはこの高原の一角にあり、中心部に五十年ほど前から陸軍演習場が設置されていた。

ドゴール時代に、軍事技術の近代化により、核装備部隊が登場、原子兵器、ミサイル、大型戦車が出現し、演習地の拡張が軍部から要請された。演習によつて道路や農地がこわされ、牧草がいためられ、ヘリコプターの低空飛行が羊の群をおびやかし、農家の廃屋や納屋が射撃目標にされ、高原の農民は戦場にいるような心地だった。

一九七〇年一〇月、演習地の南の入口にあたるラカウアルリの会議で、時のフアントン国防相はこの地方の開発計画を凍らした。軍の演習場の大拡張工事で二千人が仕事にありつくといつたので村長は賛成を表明したが、これを知った村民の中には反対の気分も強く、三カ日後には、ラルザックを救う会が発

足した。

一九七一年十月、ラルザック演習場拡張の公式発表。農民ギローさんは言う。「食事をしようとしていたところ、テレビが演習場拡張のニュースをつたえた。ちやうど、裁判の観客だった自分が、被告として宣告されたようなショックをうけた。政府のドブレ氏は、演習場が何ヘクタールとか、道路、水、飛行場について語った。しかし、住民の男、女、老人、羊飼ひ、子供たちについては何も言わなかった。こんな演習場はわれわれには必要がない。」

ラルザックの闘争

一月六日、陸軍省の公式発表に抗議する人びとがミヨー町に押しよせ、その数六千人、町や村の教会の鐘が鳴らされ、農業協同組合の代表も反対行動に参加した。

一九七二年二月一日深夜、ミヨー町を見おろす高原の北端で突然大きな火の手が上がり、消防サイレンが鳴りわたり、警察は恐慌状態にあちりつた。間もなく、火の手はあさましたが、真相は、高原の住民たちがすこしばかり大きなたき火をしたのだった。

この頃から全国の平和運動家がやって来て農民たちに、非暴力直接行動の方法を教えた。

三月二十八日、「百三人の声明」を発表した農民は演習場の拡張反対を基調にし、見捨てられてきたこの地域を着実に発展させる自主的政策と、仕事を確保するたがいに住民、労働者が取り組むことを呼びかけた。

四月に入ると、「農場開放」運動が行はわれて、多くの住民、地域の労働者が農場にやって来た。

ミヨーのサメックス紡績工場労働者とラルザック農民の共同闘争で、労働者の要求は全面的に受け入れられた。

七月一日革命記念日には、県庁所在地ロデズ市で二万人の抗議集会が開かれ、農民の七十台のトラクターがデモの先頭に立った。

一月、拡張工事を早めるための「公益事業調査条令」が県議会で採択されると、農民は二千頭の羊を連れてラ・カヴァルリ村を封鎖した。またパリのエッフェル塔の下に六十頭の羊が現われた時には、警察はその処置に困惑し、多くの全国紙がニュースとして報道した。

一九七三年になると、国民が所持していなければならぬ兵役手帳を政府に返上する運動が始まった。「軍の演習場では、開発途上国に売る兵器の試験をやっている。またわれわれの庭や屋根の上でイギリス軍が東戦そのままの演習をしている。そして、

夕方のテレビでは、この軍隊が北アイルランドで、野
砲は弾圧をしてゐるのを報道してゐる。ラルサックの
農民とこれを支持する者は、このような軍に協力する
義務を認めない」といつのが手帳返上の理由だった。

一九七三年、リップ時計工場労働者とラルサック農
民の戦闘的共闘が実現した。特別機動隊が工場を占拠
してゐた労働者を排除した直後の抗議集会では、駒け
つに農民代表が労働者を激励したのである。八月二
五日、二六日の決起集会は労働者の共同呼びかけで開か
れたが、ここには八万人が集まった。

一方では、闘争支援のために移住してきた人、入植
した人、たにかいの拠点に転進した農民たちの子弟の
ために新しい学校の設立を県に要請し、予算がないと
蹴られるや、自力で設備をととのえ、必要な道具類を
集めて、ついに県に認めさせて開校にこぎつけた。

また、政府がすでに買収した拡張予定地の中にある
ラ・ブラキエールに、農民たちは五百頭の羊を収容す
る大型の羊小屋の建設を手作りで始めた。軍所有地区
でのこの建設、移住者による農地の占拠と耕作、こつ
として農民と労働者、住民の自力行動が進められ、必要
な資金集めは全国的な運動としてひろがり、フランス
住民運動の重要な成果の一つとなった。

羊小屋を組立ててゐる石の所々には、協力したグル
ープの名、マークなどが刻みこまれており、青年、婦

人、カトリック、狩猟者、プロテスタント、エコ④
ロジスト団体、平和運動、槌と鎌、労働者、有機農
業グループなど多様だった。建設に用いられた募金
は二千三百万円というが、労力奉仕や寄附を合わせ
れば莫大は額となるであらう。

募金は税金の三%を「再分配金」としてラルサック
農業振興会に払込む方法で、GFAのためにも行な
われてゐる。これは共同農地所有と呼ばれ、一株千
フラン（六百六十四円）で募金をし、この金で拡張予
定地を買込むのである。か一回はシヤスノーウの六
〇ヘクタールだった。その後、着々と買入れは進み
一九七五年九月現在で、集まった金二千四百五十万
フラン（一億六千二百万円）農地八カ所、合計五一
五ヘクタールがGFAの下にある。この運動の結果、
農民の間には共同化の精神がはぐくまれ、また今ま
での孤立感とはちがって勇敢な戦闘スピリットが強
まった。たとえば、パラシエート降下部隊が私有地
に侵入した時、農場の住人たちは、部隊の退去を求
め、まかれまいと見るや農民が自分で軍用車を運転
して道路上に移動させた。また、三人の農民が、歩
兵部隊の射撃訓練を中止させるといふ事案もあった。
一九七四年夏、ラルサックの収獲祭は、全国から
十万人三千人が参加した。

やがて平和運動家のグループが新たに入植し、軍

所有地区のトリユエ工ル農場を占拠。軍によつて排除されるや、半壊の納屋に入った。一週間、こうして奥力で迫られ、夜には戻ってくるという根拠がつかず、とうとう軍隊は撤退してしまつた。それから三年今日では約十五人がこの共同農場に住みつており、二二のチーズや工芸品は質の良いことで有名である。

一九七五年一月には農民が国道沿いに壕を掘つて水を導くという行動があつた。これは石灰岩でできてくるこの地域の集落に必要な水道を引く計画が、軍の妨害でいつも流れていたので、長年の懸案を農民自身で解決しようとしたのである。これに対して警察が中止命令を出し、機動隊が出動した。その後、地方議員や町村長らの後押しで半ば完成した工事は一応黙認されることになつた。

一九七五年二月、拡張予定地内の私有地を強制収用するためのオー一段手続きとして土地調査をするようにとの命令が、政府から関係町村に届けられたが、住民の圧力で十カ町村の首長は調査を拒否し役場を閉鎖した。この頃から軍や警察と住民の対立が激化し、農民ギローさん夫妻と七人のこともが住んでいるラ・フラキエールの家が、三月一日深夜、爆薬で破壊される事件が起つた。

三月一五日、全国でラルサクク・デーが宣言され、ギロー一家の爆破事件、直後のミヨアの弾圧事件に対

する抗議集會が開かれた。

五月一日、演習地に通ずる道路を住民が封鎖したため、軍用車輛はストツアし、兵士たちは完全装備で演習地まで十キロ歩かねばならなかつた。母校は、兵士と農民が交流し、反軍的討論を交わすのを止めることができなかった。この頃、一時中断されていた水道延長工事が、国道東側のホテンサクク、サン・マルタンまで、リッポ工場労働者と全国のラルサクク委員会の人々の援助ででき上がった。住民が水が干上るのを待つという軍の作戦は、労働市民の共闘を打ち破られたのである。

一九七五年夏には、全フランスの他の住民運動との交流に力点があかれ、百五十のラルサクク委員会が結成されてきた。非暴力、反戦、革命、いずれの主義の者も、組織に属している者もいない者も、一緒にラルサククの闘争を支持できるのがこの委員会の特徴である。

八月一六日、ラルサクク住民代表、ホルドの北アローサンルイの住民を訪ね、この原発予定地でもGFA運動が始まり、すでに予定地の四分の一を買入れていた。

各地で、このようは交流が行なわれた。

フランス北部のアルターニユとノルマンディ(二二)にはニエルアール原若基地やフラマンヴェイル初の

多くの原発予定地、ラアーケ再処理工場があるの住民運動の代表たちは、ラルサックと連帯し、より強力を広汎な運動を展開していくために共同闘争綱領を発表した。

ランゴーニュ町のように、住民と行政が一緒になつて、「死の町」を設けて政府に抗議するような闘争も行なわれた。こうして全フランスに、「ラルサックに至るところに」という活動が拡大強化されつつある。

一九七五年九月末、ラ、アラキエールの羊小屋が完成した。先に述べたように、全国からの募金と自発的な努力奉仕によるもので、一人の大工は、設計から建築までを指導するため二年間現地に住み込んだ。学習活動もさかんに行なわれ、ラルサック大学が一九七五年から開校されてゐる。

九月一日、工科大学（エコールポリテクニク）の学生が軍事教練を受けるためにラルサック演習場に到着したが、一部の学生は軍服を着たまま公然と、農民に面会を申し込み討論をした。

こうして、農民も労働者も学生も、処罰を恐れず、自主的な自由な判断と行動の正当性を主張し、自分たちの計画を策定し提出してゐる。軍隊の内部にもラルサック委員会がつくられてゐる。

一九七六年、住民の消耗をはかるため、軍は土地買

収を試み、ブローカーが踏躓して土地価格は十倍に吊り上がった。

六月二十八日、一四人の農民と八人の住民の一隊がキャンア内の工兵地所部署事務所に入り、書類を調査した。これは、陰湿なやり方で、反対派を切りくずそうとする軍の買収停止を要求するのが目的で、この調査の結果、軍の不当な方法と価格が明るみに出された。

しかし、この行動を担った二名は逮捕され、裁判にかけられており、ラルサックでは、表面では何事もなかりかのように時は流れ、ラ、アラキエールの羊は平和に草をたべてゐる。しかし、鋭い対立のなかで、「ラルサックを守れ」と叫び続けてゐる農民労働者、学生、市民を沈黙させることはできないであらう。

カイゼル・アウゲスト 反原発闘争

スイスのNWA（北西スイス行動委員会）のストール博士から、GAK（非暴力行動委員）と共同主催で開く一月一日の住民集會に出席してほしいという招待を受けていた。

カイゼル・アウケスト原発は、出力九二万KW、BWR（沸とう型軽水炉）が建設される予定で、七

三年一二日に建設許可がありてゐるのだが、住民運動による、敷地占拠や激しい阻止行動によって未だ着工されてはいない。

当日は、気象観測塔の下での野外集會が雨の中でもたれてゐた。スイス各地・ドイツ・フランスの原発反対運動の代表が集まつてゐた。その数は八百人。

スイスの仲間たちの話によると、スイスにはいま、三つの原発が操業してあり、計画中のカカイセル・アウグストを含めて六つあるが、昨年一〇月九日の反原発交流集會で、今後四年間のモラトリアムを共通の運動目標にすることを決定してゐる。

昨年六月、フランス駐在の北原大使がラアーク再処理工場を訪問した。日本の使用済核燃料の再処理のため、イギリス、フランスの協力がどうしても必要だと日本の政府や電力会社は考えてゐるのである。

東海村の再処理工場は、いま試験中であるが、これはフランスのサンゴヴァン社の技術によつて作られたもので、世界で最も進んだものと宣伝されてゐる。

ラアーク反対の住民運動の人々の話によると、一〇年前工場がつけられた時は軍事施設としてで、住民は何も知らなかつた。操業開始後二年目に事故でヨウ素一三一が大氣中に放出し、周辺農村に拡散した。二水によつて土や草の汚染、食物連鎖による牛乳および乳製品の汚染を恐れた原子力委員会が、周辺地域で生産

された牛乳、乳製品のすべてを買上げた。しかし、事故の事実と責任を正式に認めたのは五年もたつてからだった。

一九七四年には、資料によると、確認された白血病が八件あり、うち二件は職業病と認定されてゐる。甲状腺の病気も数件発見されており、近くのケンの病院に入院したがん患者の半数はラアーク周辺地域から来てゐる。背骨に穴が明くスピナ、ビファイタ病も四件新生児に現われ、この発病率は全国平均より十倍高い。原子力委員会の調査によつても、再処理施設を中心に半径三〇キロメートルの範囲におけるストロンチウム、セシウム、ヨウ素の検出量は十年前にくらべて四倍の高さになつてゐる。

また、再処理工場内で働いてゐる労働者の労働条件も著しく悪くはつてゐる。たとえば、最も危険が大きいハーセ地帯と呼ばれるアルトニウム職場では、職員八五五名に対して、外部企業（下請など）からの作業員八四二名。職員一人当たりの年間平均被曝量は、一九七四年の〇・六五レム、七六年推定値一・五、七七年二・三、七八年四・〇〇、七九年には最大許容量五レムを超えてしまふ。

昨年九月半ばかりニカ月半にわたつてラアーク再処理工場労働者のストが行はわれ、再処理施設の民間企業への移管反対、H.A.O部門（濃縮ウランの

再処理）やアルトニウム部門の拡張中止、外部作業員
の雇用禁止が要求された。原子力委員会は、これらの
要求の検討を約束せざるを得ない状況を、モリスは
「心算結したが、労働者や周辺住民は監視の体勢にあ
る。」

マルゲイルの反原発運動

フランスの日程の最後はクレイ・マルゲイルだった。
美しい自然、静かな田園、林の中を車が走る。反原発
運動の事務所へ寄って資料をもらう。予定地にはクレ
イの塔が三つ立っており、着々と準備していることが
わかる。一九七四年末に整地作業が始まり、敷地は頑
丈な金網の堀で囲われ、気象観測用の鉄塔も立ってい
る。ちょうど半年前の昨年七月三日、二万人の大デモ
があり、フランス各地、スイス、西ドイツ、オランダ
からの代表も参加した。

翌四日には三つの部隊が敷地突入をはかり、中の一
隊が金網の堀を破って入って、後から他のものが続く
という形で十名近くが敷地を占拠し、四千人が取り囲
んで見守っていた。テモ隊と警官との討論のなかで、
「私たちは中立だ。命令によって動いているにすぎな
いので、君たちの気持はわかる」というのが警官たち
の意見だった。

夕方六時にラザン知事代理が駆けつけて、テモ
隊と交渉し、要求を上司に伝えることを約束した。
こうして坐りこみをやっていた人たちの平和な態度
は、地元の保守的層に大きな影響を及ぼした。
四日後、地元の警官ではテモ隊を排除できないと
判断した当局は、別の方面から機動保安隊を派遣し、
これが催涙弾を撃ち、こん棒をふるってテモ隊にお
そひかかった。

一日おいて、三月一〇日の抗議デモに対しても、
催涙ガスと警棒が用いられた。

しかし、こうした強行排除の結果、それまで黙
を守っていた地元の農民たちが動き出し、「この若
者たちはおれたちの身がわりになって警棒を打たれ
たのだ。」と言うようになった。地元の新聞は、「
闘争の主役が都会からやってきた学生たちから、地
元の農民たちへと変わっていった」と書いた。

シエラさんから、当時の話をききながら、「私た
ちの運動は、フランスで危険な高速増殖炉の計画を
阻止するのが目的だが、それはまた、この危険な技
術とアルトニウムが日本をはじめ世界中にひろがる
のを防ぐためでもあるのです」という言葉を胸に刻
みつける。

ラアーグの再処理工場反対の住民運動をしている
ティティエ・アンジエさんも「ラアーグ再処理工場

反対は、もちろんわれわれフランス国民のための運動だが、それはまた、日本をはじめ世界中の人民のためでもあるのです」と語っていた。

いくつがの感想



日本に帰ってきて、とりあえず幾つかのことは言える。

(1)核燃料の再処理については、作業に従事している労働者の被爆量増加、労働条件悪化に対して、労働者自身と、これを与える労働組合が真剣な闘争を始めており、事態を知った住民運動も全ヨーロッパ的に激しい輿力行動に入っている。支配層の中の変化は、西ドイツ裁判所の判決にも反映している。日本は、新聞の論調なども国民の声を反映する面がよい。

(2)再処理工場は原爆製造工場と、原理的にも作業的にもまったく同一であるということが、住民運動の人びとにもはつきりしてきた。ラルサック委員会は、各地において原子力問題と軍の演習地問題と結びつきを理解して行動している。

(3)高速増殖炉の危険は、再処理問題、プルトニウムと併せて住民運動の中に充分浸透し、原発反対運動は全ヨーロッパ的に結集し、再処理工場と高速増殖炉反対を中心目標としてますます強力な行動に向かっている。

マルケイル、ラルサック委員会は提議を強めている。今年、結着をつける年だということの表明が一日一日の集会であるが、この住民運動の決意の強さが、日本の新聞雑誌には充分に反映していない。朝日新聞の姿勢は推進側の焦りを示すものであろう。(4)ヨーロッパの住民運動の人たちには、三里塚のことを知らない人も多かったが、話せばすぐに理解してもらえた。

(5)面政の住民運動は、個々の闘争を基礎にして協力を強めて行く問題を、原理的にも実践的にも解決しつつあるように思われる。……

(ヨーロッパ)住民運動巡礼行―西尾昇―現代の眼7月号より、その内容の約三分の二を抄出しました。よりくわしくは、それについて読んで下さると幸いです。

(なお、現代の眼8月号に、この西尾氏の内容をさらに展開し説明するものとして、反核に結集した住民運動―ルイ・ブドウシ―が掲載されています。本来ならこれも収載したい好論文ですが、要約や抄出がむずかしく、見送らざるをえませんでした。ヨーロッパでも共産党は原発反対の敵対者であること保守・革新といった政治的色分けは、エコロジイ運動をめぐって、過去のものとなりつゝあることなど必説の情報が伝えられています。)